

昭和46年5月18日のこと、役所で仕事をしていると高麗の曾根田重和さん宅から「古い書き物が見つかったから今日中に来てくれ、こなければ焼却してしまう」と電話がかかって来た。「早速伺います」と返事し乍ら、やっぱり出て来たか、と思わず満面に笑みがこぼれてきたのである。

大磯町教育委員会は、昭和31年に大磯町文化史を発行し、40年に小嶋本陣資料第1輯・第2輯、41年同第3輯、42年同第4輯、43年同第5輯、44年大磯町伝馬関係資料第1輯、45年同第2輯と矢つぎばやに資料篇を発行したが、これは当時縄文・弥生の遺跡、古墳など埋蔵文化財の破壊や、農具・漁具など民俗資料の消滅が急速に進み、これらの対策として保存する運動も急速にもりあがっていたが、古文書については読解が困難なせいか全くかえりみられない状態であった。これではいけないと気づき当時たった3人の事務局職員で無理に無理を重ね乍らこれらのものを発行したのである。

こんな時に神奈川県が県政百年を記念して神奈川県史を編さんする、という事業が始まり、42年9月20日県史編さんについて近世担当の小柴俊雄さんと渡辺隆喜さんが来町し協力を依頼したので、私達は積極的に協力しましょうと約束したのである。そして好都合にも調査委員兼執筆委員の1人である小松郁夫さんが、大学院の学生の頃から大磯町の資料室に通っていた顔なじみであったので、早速小松さん達を案内して大磯の旧家まわりが始まったのである。

高麗の曾根田家は曾祖父の重兵衛さんが2代と6代の町長を勤め、祖父の重保さんが県

鈴木 昇

会議員や県地方課長・農行銀行取締役等を歴任し、父の恭男さんは曾根田医院を開業し後に21代の町長となり、大磯町名誉町民になった人なので、同家には必ずたくさんの古文書があるだろうと確信し、同家を訪れたのであったが、「うちにはろくなものはないよ」の返事であった。「そんなことはないですよ必ず何かある筈ですよ」とねばったら、そんなにいうなら土蔵の中へ案内してくれたが重和さんのいう通り、伊万里焼の皿類とおじいさんの重保さんが読んだと思われる、昔の行政法関係の本がうず高く積まれているだけで、古文書らしいものは何一つ見当らなかったのである。

がっかりし乍ら重い足を引きづって帰って来たが、心のすみには其のうちに必ずどこからか出て来るだろう、という一種の願望の様なものが残っていたのである。

この願望は其の後数年たってこの電話で美事かなえられたのであるが、さすがに旧家は違ったもので、全く使われていなかったもう一つの土蔵の中で古文書類はねむり、曾根田家の新館建築による土蔵取壊しによって百年ぶりに再び人々の目の前に出現したのである。

うず高く積まれた古文書類から少し離されて、古いとっくりや皿の類があった。或いはと思い乍ら手に取ってみると、血まなこになって探していたこゆるぎ焼であった。どきどきし乍ら、これはどうするのですか、と尋ねると、そんなもの燃えないごみの時出してしまえますよとの答えに、是非とも町の資料室へいただきたいとの申出に、曾根田家の皆さんあきれ顔であったが、ぼう大な古文書類に加え数点のこゆるぎ焼はまさに大磯町にとっ

て一大収穫であったのである。

こゆるぎ焼は明治の中頃大磯に海水浴場が開けてから土産物用に焼かれたものであるが、当時海水浴へ来た人々は、トップクラスの政治家や実業家・芸能人であったから、ごく上等の焼物でなくては土産物にならず、非常に良い焼物であり、今年（60年）の7月惜しくも故人となられてしまった安井小弥太先生の努力によって、遂に焼物の専門誌にも其の存在が認められた素晴らしい焼物で、花水川の土手から発見された破片によって、当時海水浴客で繁昌し音羽屋こと5代目尾上菊五郎氏

がいつも此处で休息していた禱竜館で、こゆるぎ焼を使用していた事も判明、其の後大磯に来ていた役者さんから頂戴したものだという立派なお銚子と猪口のセット2組も発見され、根気よく探すと、もっともっと出てくる可能性のある焼物である。

今新しい図書館が出来、その昔せっかく集めても置きどころに困った時代を回顧し乍ら、こと資料室がますます充実し町の皆さんから親しみ愛されることを願ってやまない次第である。

（町収入役）

~~~~~うらばなし~~~~~

蜜大発生！ 梅雨明けを直前に大変なことがおきました。場所は社会教育課倉庫。通称「木造校舎」には、社会体育関係の道具はもとより、町民から寄せられた歴史民俗資料が所狭しと置かれています。——ヤバイ！ 燻蒸の行届かない民俗資料が原因か。しかし、どうもおかしい。特定の場所から湧いているようだ——そこで原因はネコの出入りが動物の死骸と断定。早速職員による消毒大作戦を挙行しました。

消毒から1ヶ月過ぎた現在、蜜は1匹も見当たらないことから、どうやら作戦は成功。しかし、激しいかゆみとさまざまな教訓を残して通り過ぎた「悪夢」でした。

◆◆◆ 研究ノートから ◆◆◆

神 楽

ラジオもテレビもなかった時代、ムラの祭りにおこなわれる神楽や芝居は最も大きな楽しみのひとつでした。その神楽の元締をしていたという家が国府新宿に2軒あることを耳にしました。いずれも六所神社の参道沿いの家で隣接していますが、別々に活動していたようです。これについては分裂したものだとか、もともと派が違うと言われており詳しいところはわかりません。

公演依頼があると、元締は神楽師たちを召集します。神楽師は大抵7～8人。地元国府新宿をはじめ、秦野・愛甲・戸塚方面から集

まったといいます。世襲制ではなく、ほとんどの者は農業をやりながらの副業的なものでしたが、明治末～大正にかけての全盛期には面・衣装などの道具を荷車やリヤカーにのせ、大磯二宮近郊はもちもん、遠く藤沢・小田原箱根・真鶴まで足をのばしました。

国府祭の鷲の舞も、かつてはこれらの神楽師たちが舞い手だったようです。しかし、当時すでに若い舞い手はおらず、後継者が育たなかったようで、昭和のはじめには元締の廃業に伴い神楽もすたれてしまいました。